

取材・文／松井大助
撮影／平山 諭

開智未来中学・高校(埼玉・私立)

歴史を「覚える」ではなく「考え、理解する」ことで「世界が見えてくる」ことを楽しみ、今に活かす

世界史の授業は、ともすれば生徒から「暗記科目」「他の国のこと」などと思われがちです。そのイメージを払拭し、世界の歴史の流れを学ぶことの楽しさと、その意義を届けようとしている先生の実践をご紹介します。



自分自身が
探究する気持ち
を持ち続けたいです



今号の先生

社会科 野中俊希先生

開智未来中学・高校の1期生として学び、大学を卒業後、母校の教員に。高校時代に学校行事をICTの面から支えるなど、ICTに慣れ親しんでおり、授業におけるICTの活用にも積極的に取り組む。同僚の工藤先生から引き継いでいる世界史マスタートextのデジタル化も構想中。

生徒に対する想い

**世界のことを自分事と考え、
社会で生きる教養を培う**

開智未来中学・高校の野中俊希先生は、世界史の授業を通して感じてきたことがある。世界史にふれた当初、多くの生徒は「他人事だと思っている」ということだ。

「世界の出来事が自分にも関係する」と感じた経験がまだ少ないのだと思います。それは20代の僕も同じかもしれません。ですが、だからこそ世界史の授業では「自分事として考える」ことを意識しています。歴史の流れに自分を組み込み、「もしこの時代の住民だったら、兵士だったら、奴隷だったら」と考えるのです」

そんなのただの妄想じゃないか、と言う人もいる。でも野中先生の認識は違う。「歴史の事実に基づいて当事者になりきって考えることは、妄想ではなく、『社会の中で自分がどうありたいか』を思考・判断するスタートになると思っています。しかも自分で思考して『こんなことがあったから、世界はその後こうなったのか』と歴史のつながりを見出せるようになります。『世界が見えてくる』のが楽しくなり、もっと調べたくなります。単に歴史用語を『覚える』のでなく、そうして歴史の流れを『考え、理解する』と、今に至る背景がわかり、世の中のことでも理解しやすくなります。そのときに世界史で学んだことは、この社会を生きるうえで必須の教養

になると思うんですよ」

ただ、生徒一人ひとりが世界のことを自分事では考えるには、土台がまだ十分にできていない、と感じることもある。

「あるテーマを考えるために教科書や資料を読むことから始めても、読むことに慣れていなくて、内容の把握でつまずく生徒がいるんです。あるいは、資料を読んだ思ったことがあっても、『これが正解なのか?』と気にして発言できず、話し合いで考えを深められない生徒もいます。読解力や、意見を出す力も、授業で高めていく必要性を感じています」

野中先生の授業は、生徒が資料を読み込み、意見を出し合い、歴史のテーマを自分たちで考えるのを基本としている。そしてその方針を最初の授業で生徒にも伝えている。「自分たちでしっかりと考えて、話し合って理解していこう。僕にできるのはそれを支えることです」と。

授業の実践

**判断材料の資料を読み込み
既存知識も活かして考える**

1学期終盤の3年生の授業では、生徒が2コマを使って「ベルサイユ体制」について考えた。第一次世界大戦後、各国の講和条約によって築かれた国際体制。その場に自分がいたら、どんな講和条約を結び、どのような体制を目指すかを「学んだ近代史を踏まえて」思考したのだ。



ICT活用にも力を入れていて、文書や写真、地図など多様な資料を用意、プロジェクターで映すほか、生徒の手持のタブレットからも、資料のデータを自由に取り出せるようにしている。



授業中ではなく、休み時間中の一場面。授業が終わった後も、生徒同士で話し合っていたり、調べ物を続けていたりすることが結構あるという。

INTERVIEW



学び合いやICT活用を ねらいをもって推進

校長
加藤友信先生

本校では開校当初より、生徒の学び合いを推奨し、質問することや投げかけに反応することを大事にしてきました。野中先生は本校の卒業生でもあり、そうした学びを体験されてきています。それだけに、自身の経験も活かして、学び合いの授業を推し進めてくれていると感じています。

ICTの活用にも積極的です。世界史の授業では、同僚の工藤先生が作った独自テキストがあって、生徒たちのバイブルとなっているのですが、野中先生はそこに加えて、写真や動画、意見を集約するシステムなどもうまく使ってくれています。

もちろんICTはあくまでも道具です。私自身、情報の教科を担当し、「スマホやタブレットを何かを使うときは、画面の向こう側に仕組みを設計した人がいて、その人次第で良くも悪くなる」と生徒に伝えてきました。ICTを導入すればいいという話ではなく、先生の中にやりたいことがあり、そのためにICTを使うことが重要で、野中先生はそうした授業デザインをされていると思うのですよ。

開智未来中学・高校(埼玉・私立)



School Data

普通科/2011年創立
生徒数(2020年度・高校)477人
(男子276人・女子201人)
進路状況(2019年度)大学135人・短大3人
専門学校/各種学校7人・その他42人
〒349-1212 加須市妻倉1238番地
TEL 0280-61-2032
URL <http://www.kaichimirai.ed.jp/>

Outline

教育目標は「国際社会に貢献する心豊かな“創造型・発信型”リーダーの育成」。開校以来、学び合いを積極的に取り入れ、6つの授業姿勢(ねらい・メモ・反応・発表・質問・振り返り)も大事にしてきた。各教科や探究活動と連動した「哲学」の授業を行っているのも特徴の一つ。また、ICTの導入についても、単なるテクノロジーの学習ではなく、「つなげる知能」の育成という位置づけの下、力を入れてきた。2019年度よりタブレットを生徒が1人1台持つ学習環境が整っている。

とはいえ、複数の戦勝国と敗戦国の思惑が入り乱れるなかでの講和条約は複雑で、徒手空拳で考えるのは難しい。そこで野中先生は資料を示してみせた。

「とある人物が講和会議の原則を提案したんです」と。当時の米大統領、ウィルソンによる「平和十四カ条」だ。生徒たちは考えるための準備として、隣同士の間で、まずはこの条文の抜粋版の読解と要約にチャレンジした。

「秘密外交の禁止」。国民の目の届くところで外交をしよう。「民族自決」。各民族が支配されず、自分で自分の運命を決められるようにしよう。提唱されたのはそんな原則で、全体でも情報を共有した。ここからがいよいよ本題だ。

生徒たちは各自が戦勝国側の米・英・仏・伊・日のいずれかの代表役になり、講和条約の内容を話し合うことになった。まずは個人ワーク。自分の担当した国について、敗戦国側にどんな条約をつきつ

けたか考えた。野中先生がイメージを喚起する。「ポイントは各国の思惑です。これまでを踏まえると、希望とか、欲望とか、恨みとか、いろいろありますよね」

次にグループワーク。同じ国を担当した生徒同士が集まり、意見を出し合った。例えばフランスのグループでは——
「賠償金、もらえるならもらいたいよね」「アメリカに借金もあるんだし」「領土問題は？ 首をつっこむと……」

続いて別のグループワーク。今度は各国の代表役がそろって5人組で、講和条約の中身を話し合った。他人の意見に耳を傾けるのが前提だが、「自分の国の意見もちゃんと主張してください」と野中先生。「意見を押し通さないと、その代表は国に帰ってからどうなる？」と発破をかけた。

すべてのワークを終えてから、教科書の内容を確認した。敗戦国の海外植民地は剥奪され、戦勝国が「委任統治」

した。民族自決の理念からそれを植民地とは表現しなかったこと。ドイツに天文学的な賠償金が課されたこと……。社会的理想と現実を体感しさらにその先まで話し合う

史実に基づく生徒の思考はさらに続く。講和条約により1920年には「国際連盟」が発足するのだが、この組織は哲学者カントの著書『永遠平和のために』に影響を受けたという。その日本語訳の抜粋を読み、「自分たちならどんな国際連盟にするか」もペアで考えてみたのだ。

ワーク後、実際の国際連盟の体制と欠陥を確認。何か釈然としない空気がなったところで、野中先生が切り出した。「今日の内容について混乱している人もいると思うんです。みんなで読んだこと、考えたこと、実際に形になったこと。完全に一致していたかな。違和感があったら、どのあたりでそれを感じた？」

最後に二人組で話し合ってください」

そのペアワークでは、平和十四カ条と講和条約の具体的な食い違いを指摘した生徒もいれば、「きれいごとを言っても、結局、勝った国しか平和になってない」と全体の印象を語った生徒もいた。締めくくりに野中先生が投げかけた。

「カントの著書には『将来の戦争の種をひそかに保留して締結された平和条約は、決して平和条約とみなされてはならない』とあります。実際には、講和条約後にドイツでは不満がたまり、ある政党が台頭し、他国に攻め入ります。平和を目指したはずのベルサイユ体制は『将来の戦争の種を蒔いた』とも言えますね。いわば皆さんは、国際協調体制を目指したときの『理想』と『現実』にふれたわけです。そして理想と現実が離れていたことで、世界では戦争の種が発芽して再び大きくなります。だから、明日からはその続きの話をまたみんなでしようよ」



結びつきを発見する楽しさを知り 自分の専門に活かしてほしい

社会科
工藤 智先生

公立高校で約30年、この学校で約10年、世界史を担当してきました。世界史の何が面白いかといえば、昔あったこと、この前あったこと、今あること、それらが「結びついているんだ」と感じられることです。この感覚を味わうとやみつきになるんですよ。世界史はいろいろ結びつくから。そんな授業で生徒が笑っているのを見たときが、一番幸せですね。

歴史の結びつきをとらえる感覚は、この先いろいろな専門分野に進むうえで役立つはず。経営でも経済でも、建築でも医療でも、昔のことをさかのぼって今につながる流れを理解し、それを踏まえて自分の在り方を見つめ直す、というのは大切なことだと思うからです。

高校生だった野中先生のこと、覚えていますよ(笑)。私と同じ進路を志望したと聞いたときは、いずれこの学校に戻ってくるのかなと思えました。生徒の中に入っていきけるのが野中先生の強み。得意とするICTも使いこなし、世界史の授業をさらに面白くしてほしいと思っています。

野中先生にとって開智未来中学・高校は母校でもある。しかもその生徒のときに、工藤 智先生の授業を受けたことが、今の道に進んだきっかけでもあるという。「小学生のころから教師にあこがれはありましたが、高校時代に工藤先生の世界史の授業を受けて、どハマりしたんです」

高校卒業後、工藤先生と同じ大学の史学科に進学。教師になって母校に戻り、そのあこがれの先生に師事した。

面白く学ぶためのテキストが 受験でも威力を発揮した

授業ができるまで



1 誰もが答えやすい質問を織り交ぜ、 生徒とのやり取りを活性化させる

授業では、野中先生の問いかけに生徒が思い思いに答える対話を何度も行う。その際に怖がらず答えられるよう、「平和十四カ条ということは何か条？」など答えやすい質問も意図的に盛り込んでいる。結果、「これはどう思う？」という自由回答の質問にも、生徒はリラックスして思ったことを口にしていった。

2 前に学んだ場所や出来事について 歴史の流れの中での復習を繰り返す

前にも学んだ場所や出来事については「これはどの時代にどういう内容で出てきたんだっけ？」と問いかけ、生徒同士ペアで説明し合うことを求め、歴史の流れの中で復習することを繰り返す。今学んでいる時代とそれ以前の時代の結びつきを感じてほしいからであり、その場所や出来事への理解も深まるからだ。

3 授業でもテスト勉強でも、暗記ではなく 「説明できる＝理解している」状態を目指す

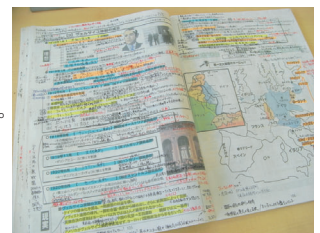
工藤先生が作ったマスターテキストは、空欄に重要語句を書き込んだり、記載されたキーワードにマーカーを引いたりして活用する。ただし、その語句だけを暗記することは推奨していない。テスト勉強でも、テキストを見返しながら「歴史の流れを自分で説明できる＝理解している」状態を目指そう、と促している。

4 生徒の関心が高まり、考えが深まるように ネタ集めや資料の選定・抜粋に力をいれる

教師として歴史の本をたくさん読んで面白いことを見つけ、生徒と共有していくことを重視。資料の提供では、文書や写真や地図など、どの形で届けると生徒により響きそうかを考える。また、生徒が限られた時間で内容を読み取って考えを深められるよう、どのポイントを抜粋すればいいかも吟味する。



生徒の使い込んだマスターテキスト(写真上)。野中先生はそれ以上にこのテキストを使い込んで勉強している(写真下)。



だから、野中先生の授業のルーツをひも解くには、工藤先生の授業とはどういふものかの説明から始める必要がある。その特徴は、自作作成の「マスターテキスト」を使っていることだ。授業中、生徒は板書をノートに写すのではなく、このテキストにマーカーを引いたり、書き込んだりする。テキストの原型は、工藤先生が開智未来中学・高校に来る前、公立高校で教師をしていた時代に生まれたという。

「授業中も生徒が歩くような学校にいたときに、『どうすれば生徒が世界史を面白がって勉強したくなるか』を考えたいんです。板書を写させるより、話術で引き込む。独自のテキストを作り、教科書の内容だけでなく、面白いエピソードや写真を散りばめよう、と(工藤先生)

授業の形式は講義型。ただし一方通行ではない。問いかけによく反応する生徒を4月から探り、そうした生徒を軸に、次々に生徒に話を振り、ときに脱線し、ウケねらいの返答もうまく転がし、得意即妙の

やり取りで歴史のストーリーをつむいでいく。答える生徒も、まわりで聞く生徒も楽しそう。まるでアドリブ発言大歓迎の舞台の上になんが在るよう。

そうして生徒が世界史を楽しんで学ぶようになると、その記憶とつながるマスターテキストを復習に用い、受験でも結果を出していく。野中先生は、まさにそれを体感してきた一人なのだ。晴れて工藤先生の同僚になると、自分の授業でもマスターテキストを活用させてもらい、授業の仕方も真似ることから始めたという。

真似るだけでは劣化版 楽しい授業を自分でも模索

しかし、マスターテキストさえ使えば良い授業になるわけではない。1年後、野中先生は「このままでは劣化版コピーになる」と危機感をもったという。

「話術や知識量などで工藤先生に追いつけない自分では、授業中うまく話を展開できないことがあったんです」

だから2年目からは、マスターテキストを使いつつ自分なりの授業のやり方を模索した。ペアやグループによる資料読解、意見交換、発表など、生徒同士で学び合う活動を増やした。資料提供や生徒の思考の支援にICTをどんどん活用した。

野中先生の授業は、工藤先生とはまた違ったスタイルに発展していった。

でも目指した方向性は「一緒だった」。

「生徒が『世界史が楽しい』と思えるようにするには、自分だったら何ができるかを、いろいろ試行錯誤してみたんです」

生徒はこう変わる

昔と今の結びつきを発見し、意見交換を楽しむように

野中先生や工藤先生の授業は、生徒からも前向きに受け止められている。なにして、定期テストや大学入試の点数でもしっかりと結果がついてきているのだ。

世界史への関心が高まった生徒も多いよって、他教科の先生から「生徒たちが家でも世界史の勉強ばかりしていて、こちらの学習が足りていない」と冗談交じりに嘆かれたこともあったという。

野中先生が嬉しく思うのは、質問にける生徒の姿勢に変化を感じたときだ。

「最初は『ここがわからないです』と理解

自分たちで調べて歴史の学びを今に活かす

——野中先生の授業の特徴といえばなんですか？

遠藤さん「教科書には載ってないような面白いエピソードにもふれてくれるので、頭に入りやすいです」

佐藤さん「続きが気になるような授業をしてくれます。だから、休み時間にみんなでタブレットで調べるのが面白かったです」

宇都木さん「気になったら自分たちで調べられる環境でもあるんです。いろいろな資料も用意してくれるので」

渡邊さん「生徒同士の学び合いとか、先生との質疑応答が多くて、自分たちで考えを深めていける授業だと思います」

林さん「自分だけでは気づけないことも、友達と一緒に学んでいけるのがいいなと思っています」

——授業で学ぶなかで関心が高まったことはありますか？

佐藤さん「昔の人たちの国の動かし方や、外交の仕方です。例えばドイツの首相だったビスマルクの政策だったり」

林さん「言語に目がいくようになりました。その国である言語が使われるようになったその背景には、歴史的な物語があるので」

遠藤さん「ヨーロッパ建築の美術様式などを写真も見ながら自分たちで調べるなかで、建築物に興味をもつようになりました」

——世界史を通してどんなことを学んでいると感じていますか？

宇都木さん「こういうことがあったから、こうなったという、今にも通じる物事のつながりを学べているように思います」

渡邊さん「現実世界と過去がどんどんリンクしていくんです。昔の人のやったことや考えたことから学び、今に活かしていくことが、歴史を学ぶうえで大切なことなんじゃないかな、と思います」



左から、遠藤胡桃さん、林駿希さん、佐藤聖堂さん、渡邊諒さん、宇都木唯さん

不足のところを教わりにくる生徒が多い

のですが、次第に『これについてどう思ったんですけれど、どうですか？』『ヨーロッパのこの出来事が何かアジアにも関係していますか？』などと、自分の考えや疑問をもつて話し合いにくる生徒が増えるんです。そうした発展的な話をできるのは、僕自身も楽しいです」

同じような思いは工藤先生も抱えている。「授業で生徒とのやり取りを積み重ねていくと、昔と今の結びつきについて生徒が面白い発見することも出てきます。そうすると私もわくわくするんですよ」

世界史の知識や学び方を教師もアップデートし続ける

そんな世界史の楽しさを生徒とともって共有できるように、野中先生は自分自身も

世界史についてさらに勉強したいという。

「教育実習生でこの学校に来たときに、工藤先生から言われて胸に刺さった言葉があるんです。『世界史の授業をつくるのに一番大切なのはネタ集めだよ』と。実際、工藤先生の授業をコピーしていたときに、その点を痛感したんです。同じテーマで話をしても、読んできた本の冊数が全然違って、生徒の好奇心を呼び覚ますような話の広がりはまだ自分には足りない、と。だからもっと本を読まなければ、と思いますし、そこで知り得たことを生徒がどのように学べるとよいかも研究していきたいです。より響く説明の仕方とか、より学びが深まるICTの活用とか。どんな歳になっても、自分自身が探究する気持ちを見失わずに、授業に臨んでいけたらと思っています」



思い描いている授業の在り方

目指す生徒像

- 歴史の流れを考え、理解することで、今の世界の背景にあるものをつかみ、この社会を生きるうえで必須の教養を深めていく
- 資料を読んだり、仲間と意見を出し合うことで、自分の考えを深めることができる



歴史の授業

自分事
で考える
話し合う

- ・ 歴史のテーマについて、これまでの学習内容や参考資料も踏まえて、自分事として考える
- ・ 考えたことについてペアやグループで議論したり、発表をし合うことで、さらに考えを深める

資料を
読み込む
分析する

- ・ 文書の資料を読み込む。法律のような難解な資料を読むときは、音読やペアでの内容確認も行う
- ・ 写真や動画、地図、統計などの資料を基に、そこから読み取れることを自分たちで調べる

他の教育活動や社会とのつながり

- ・ 学校全体で、生徒の学び合いを推進。自ら質問することや投げかけに反応することを重視している
- ・ 教科書にはないが学習内容と関連する古今東西の社会的事象についてアンテナを張り、生徒とも共有する